

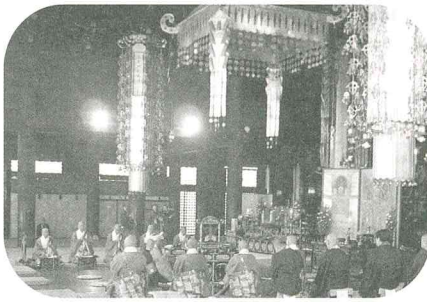
# 京 仏 連 だ よ り

編集・発行  
 京都府仏教連合会  
 代表 佐藤 諱 学

事務 総 局  
 〒605-8686  
 京都市東山区林下町400  
 総本山 知恩院総務部内  
 ☎075-531-2111  
 Fax075-571-0099



花まつり



成道会



仏教講演会

## パキスタン大地震救援基金協力への御礼

去る十月二十二日(土)に開催いたしました、平成十七年度仏教講演会に際しまして、参加者の皆様より、昨年十月八日に発生しました、パキスタン大地震救援資金に対して温かいご協力を賜りました。心より御礼申し上げます。お寄せいただきました、一万三千二百二十円の浄財は、全日本仏教会救援基金へ送りましたのでご報告致します。

## 救援金の御礼

謹啓

慈光照護のもと、ますますご清祥のことと慶賀に存じ上げます。

平素より本会の活動にご理解並びにご協力をいただいておりますこと厚く御礼申し上げます。

また、この度はパキスタン北部大地震の被災地支援のため救援資金に対し、格別なるご協賛を賜り心より感謝申し上げます。

本会では、仏教精神を基調に、全一仏教運動の展開と世界平和の進展に寄与することを目的に、国内外の救援に努めて参りますので、今後とも温かいご支援のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

合掌

平成十七年十二月二十二日

財団法人 全日本仏教会

京都府仏教連合会 様

ご

挨拶

拶

京都府仏教連合会理事長

佐藤 諦 学



このたび平成十七年、十八年度の京都府仏教連合会事務総局を浄土宗総本山知恩院が担当させていただくことになり、不肖私が不二川公勝前理事長の後継者に選出されました。本連合会では、釈尊のみ教えのもと、あらゆる人と社会の平和を願いこれを具現するため、会員相互が連携して教化伝道の諸事業を実施してまいりました。これらの事業には大きな期待が寄せられております。これを継承し、更に発展させることが私の責務であります。皆様のご指導ご支援のもと、この大役をつとめさせていただく所存でございますので、どうかよろしくお願いいたします。

さて、「二十一世紀は心の時代」こんな言葉で新しい時代を迎えました。温かい心と心の交流により世界の平和を築いてゆこうという大きな望みが託されております。しかし平和実現への道程は遠く厳しいものであることは周知のとおりであります。混沌とした国際情勢は容易に好転しそうもありません。イラクでの武力による制圧とテロの応酬はいつまで続くのでしょうか。繰り返される闘争に巻き込まれる数多くの犠牲者、そしてその中には未来を託す子供達も数多く含まれております。

一方、国内でも自分の欲望を満たすため平気で人命を奪う残虐な行為はあとを断ちません。弱者へのいじめも悪質となり、これを苦にした自殺まで発生しております。「ニート」と呼ばれる若者の増加もこんな世相を反映しているのではないのでしょうか。「いのち」の尊厳を説き、人の和を訴える私達仏教徒は多くの課題を抱えております。今後更に連携を深め、京都府仏教連合会活動を通じて応えてゆこうではありませんか。皆様のご協力をお願いし、ご挨拶いたします。

## “新体制がスタート”

—平成十七年度

第一回理事会・

評議員会開催—

去る七月四日(月)十一時より、平成十六年度第一回理事会・評議員会が開催された。

今回の理事会・評議員会では、平成十五・十六年度の理事並びに評議員の任期満了にともなう改選が行われ、新たに平成十七・十八年度の理事並びに評議員が選任された。また、その他の議案についても慎重に審議が行なわれ、すべての議案が承認可決された。

なお、理事長の就任と併せて、平成十七・十八年度の事務総局は、浄土真宗本願寺派(西本願寺)から浄土宗総本山知恩院へ引き継がれることとなった。

当日は、午前十一時から、総本山知恩院事務棟三階会議室において理事会・評議員会が開催された。

まず各単位仏教会並びに各宗派・本山から、平成十五・十六年度の評議員として推薦された方々によって評議員会が行われ、平成十七年・十八年度の理事・監事が選出

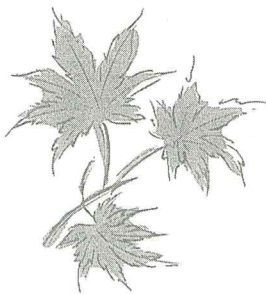
された。その後、新しく選出された理事によって理事会が行われ、最初に平成十七・十八年度の理事長の選出についての議案が上程され、慣例により事務総局を担当する浄土宗総本山知恩院の佐藤諦学理事が新しく理事長に選任された。

次に、平成十七・十八年度の事務総長の指名についての議案が上程され、本件についても慣例により、浄土宗総本山知恩院の貴田善澄総務部長が理事として指名され、併せて事務総長に選任された。

続いて、平成十六年度の京都府仏教連合会決算について承認を求める議案の上程があり、会議に先立って行われた会計監査の

報告(豊田元彦監事より)の後、質疑応答を経て全会一致で承認可決され、議案上程した審議事項は滞りなく承認可決された。  
(決算書十八頁掲載)

以上を以って、理事会・評議員会が閉会となった。



京都府仏教連合会主催

## 平成十六年度「仏教講演会」報告

平成十六年十一月六日、西本願寺において、「仏教講演会」が開催された。

今回は、講師に立松和平氏をお迎えし、「自然の中に仏を見る」と題して

「講演をいただいた。講演の内容は以下の通りである。

今年はずっとクマが出て、出てきたら片端から撃つて殺そうと待ち構えているような感じがします。なるべく麻醉銃で撃つて奥に放すようにしているんですけど、しかしまた出てきてしまう。二回ぐらいやってもうこれはだめだとすれば殺す。そういうことを繰り返し繰り返しやっているわけです。クマにはクマの事情があり、人間には人間の事情が当然あって、行動というのは全部そういう必然性があるわけです。どうしてクマが出てくるのかというところ、クマの食べる木の実がなくなっているからです。例えばナナカマドとかコクワとか、それからこの辺ではシイの実とか、北の方に行くとミズナラとかドングリです

ね、ドングリは非常に脂肪分が多いからこれを山ほど食べて体を脂肪の衣で覆って冬眠をするのが大体クマの生き方です。食べなければ生きていけない、当たり前のことですが、そういう食べ物がなくなるような天候異変が大きな原因だと思います。京都で駅を降りたら紅葉を見に来る人が多くてびっくりしました。日本人というのは季節の変化にすごく敏感ですね。私も今年紅葉を見にこちら動きました。先程司会の方が、歌舞伎座の『道元の月』を紹介してくださいましたが、二年前と去年と南座で公演しまして、この中で永平寺の自然を南座に再現しました。今、準備している第二弾の歌舞伎では、日光の紅葉を歌

舞伎座に再現しようという計画を立てています。そこで歌舞伎座の関係の人たちと紅葉を見に行つたんです。けれども今年は紅葉があまりよくない。何となくだらだら暑くて、いつの間にか秋になって、北海道ではもう雪が降っています。紅葉の上に雪が降ってきたというような感じで、季節というのは毎年毎年違うんですね。今年は山の木の実がなくなったときに台風が来て全部落ちてしまった。クマも食べ物があればひもじいですからつい出てきてしまうのでしょう。そして人間の食べ物の味を覚えるとおいしいものですから、ついそちらの方に気分が行ってしまうのでしょうか。それだけの原因でクマが出てくるのだと思います。クマも、恐る恐る出てくるんだと思います。

そのようにクマが出て来ざるを得ない天候変もありますが、もう一つは、山の木をたくさん切つて、杉や檜という人間のためになる木は植えるが、例えばナナカマドのように綺麗なだけで人間の役には立たないような木は植えない、こういう経済を主体

とした価値観があると思います。しかしシナナカマドのあの赤い実は、鳥が越冬するのに大事な食料なんです。それをクマも食べるわけです。しかしそういう木が経済林ではないからといって人工林になる、つまり杉や檜ばかりを植えていったためにこれらがなくなってきたことも大きな原因だと思います。どうしても造林しなければならぬい事情もあるでしょう、家を建てなければ人間は生きていけないんですから。それを全部否定するわけではないけれども、僕は山の片隅に実のなる木を意識して植えて、山の動物が生きられるようにすべきではないかと思っっているんです。

僕はよく知床に行つてはクマを見ています。大きなヒグマで、いつも決まった場所で見られます。通常山に入るときはラジオをかけながら入るのが一番いいんです。あとはクマベルを使ったり、「わー、わー」と大きな声で叫びながら歩くんです。そうするとクマがこちらの気配を察知して姿を消すんですね。人間は全然気付かないんですが、こういうときは、クマの方が怖いん

ですね。でも不幸な遭遇というのがあつて、お互いに抜き差ししない関係になつたとき肉体的に強いクマが人を襲うことになりません。しかしクマが、人間より力が強いからといってそれを誇示して人間に向けていくということは余程のことなんです。これはひどい目に遭つた記憶があるとかいろいろ原因があるわけです。例えば、知床には番屋があつて、クマがたくさん出るのでそのたびに猟師が撃つて殺していたのだそうです。ところが殺しても殺しても幾らも出てくるので、考え方を変えたそうです。そもそもクマのほうが前からいたんじゃないか、と放つたらかしたんですね。そうして二十年程経つと、クマが出て来るのが普通になりました。僕も友達とかと一緒に رفتりするんですが、行くのと「今、クマがああ辺にいたよ」と言われて行くと、クマが向こうから歩いて来ました。いいなと思つて川のふちの高いところから写真を撮りました。そのうちクマは、川原や海辺の石を引っくり返してそこにいてるアリのなめはじめました。クマは

ただアリの食べたいからおりてきただけで、他に理由はないんですね。お釈迦さまの話に、ゾウが暴れるので何とかしなければいけない、殺そうかという話になっているところにお釈迦さまが現れておっしゃつた。「ゾウはただ山に帰りたいだけです」と。そうしてゾウを山に返したら、すぐに静かになった。自然というのはそういう感じなんだろうと思います。だんだん近づいてくるクマの写真を撮っているうちにカメラ的に非常にいいアングルになって、最後は顔がアップになりました。ファインダーいっぱいにはクマの顔が入つてすごくいい写真が撮れました。そのうちにフォーカスが合わなくなりまして。ふと見たらクマがすぐそこにおいて、僕が「おう」と言つたら向こうも「おう」と言つたんです。本当のことを言うとクマは、全くこちらの顔を見ようともしない。「いない」というふうになっているんです。これは何かの間違ひだと自分には言い聞かせながらクマも僕もお互いに気にしないようにしていました。そのあとクマは目の前の川べりに行き、川で泳いで

また上がってきました。そして濡れている体をブルブルとふるわせて水を弾きまわしたので、僕は慌ててカメラのレンズを押さえていました。クマというのは臭いんですよ、お風呂に入らないから。それから暫くそばにいて写真を撮り続けました。途中レンズやフィルムを交換する間が何となく怖いような、間が持てないような気分でした。しかしクマは別に何をするわけでもなく気の向くままに動いていました。最初はそれをじっと見ていましたが、そのうちお互いに飽きてしまつて、僕はクマに「またな」と言つて出ていきました。嘘みたいな話だけれども。ここだけです、どこにもクマがいるのは。もし動物園のクマのおりに入れと言われたら、僕は嫌ですね。恐らく人間に対する恨み、因果を持つているだろうから、折があればその因果を果たせうとするでしょう。しかし知床のような大自然の中のクマは違うんですね。先月知床に行ったときは、ちょうどクマがたくさんシヤケをとっていました。クマは本当に贅沢で、おなかの身しか食べないんです。

オスだったら食べないですね。生命の不思議というものはいろいろありますね。例えば山が川の水を流していき、山のいろいろな木の成分が川に流れ込んでいく、そしてプランクトンもできてくる。そしてシヤケが川に上ることによつて海のものももう一つお返しされる。これは循環されてるんだという学者もいます。これは決して一方的ではなくて、逆にシヤケも自分の体で循環させているんですね。勿論シヤケはクマが食べなければキツネやカラスに食べられるし、カモメも鳥も、すべてのものが食べる。最終的には微生物が食べて分解するわけです。何か命というものはすべて循環していて、その中にクマもいるしシヤケもいるし、人間もいる。だからそういう自然の中にいると、「草木国土、悉有仏性」、自然のものにはすべて仏性があつて、仏になる素地がある、という仏教の大切な言葉ですが、けれども、そういうことを感じます。つまり生きとし生けるものはみんな同じですよ。クマは確かに体が大きくて強いんですが、しかし別に自分から凶暴な生活をした

いなどとは思つていません。ただそういう条件の中で生きてるだけなんですよ。すべての生き物を見ると、「幸せになりたい」と思つて生きてるだけだろうと思ふんです。人間も同じでしょう。生命にとつて幸せとは何かといえ、生きる環境があること。食べ物があつて、寒くなくてもその寒さに凍えない、暑さ寒さに負けないことですね。それと平和で争いのないことなんです。これがすべての生き物の願いなんです。草だつて、カビだつて、幸せの基準は我々の幸せの基準と何ら変わらないものだと思つています。

今、自然の中のバランスが崩れています。特にシカが増えて大変です。知床では、イタドリが藪がざつと続いていて、そこにクマが入つてイタドリを食べる、という風景が普通にありましたが、六、七年前からイタドリが全くななくなつて、クマが食べられない草ばかりになつてしまつたんです。シカが食べてしまつたんですね。日光でも、芝を刈つたように笹がなくなつてしまつている。今までは向こうが全然見えな

いぐらい笹があつて、そこにマイタケとかおいしいものが生えていたんだけど、シカが入れないように鉄で金網を張ってフェンスをついたら、そこだけ元の植生が守られてしまつて本当に芝刈り機で刈つたみたいになつてしまいました。シカがふえた原因の一つは、オオカミが絶滅したことです。明治時代にニホンオオカミが絶滅しました。奈良で最後のオオカミが撃たれて死んで終わったとされています。それでシカに圧力がかからなくなつてきたのです。次に、かつて全国にいて狩猟活動をしていたマタギがいなくなつたり、国立公園などができて狩猟が禁止になつて保護されてきた。オオカミの次ぐらいに怖い人間の圧力もなくなり、そのためにシカがふえてふえて、自然のバランスが崩れているんです。日光と地続きの尾瀬でも、今ではシカのいる風景が当たり前になり、クサモミジのような草をシカが全部食べてしまつて、非常に厳しい状態になつていきますし、北海道の阿寒でも知床でも同じようにバランスが崩れてしまつています。みんなそれぞれが幸

せになりたいのだけれども、なかなか思つたようにいかななくなつてきていて、人間が圧力をかけてある程度コントロールをしなければいけない時代なのだろう、という感じがします。確かにシカはつぶらな瞳をしていてかわいいですよ。かわいいからといってそのまま手をつけないでいると、どんどんふえてしまふ、これが現状ですよ。単なるヒューマニズムの保護だけでは通じない。共生き、ということの中身を点検しなければいけない時期に来ているという気がするわけです。これから一体どうなっていくのか。自然のバランスが崩れてしまつたということはこれからじわじわと我々の生活を圧迫してくるだろうと思ひます。

今、ボランティアで木を植える運動をしています。二つの大きい運動をしています。

一つは、始めて四、五年経ちますが、「古事の森」という運動を始めました。京都でも鞍馬山に二回、木船神社の向かいに古事の森をつくりました。先月は神宮備林

のあるキノ檜で古事の森をつくり、九月には高野山でもつくりました。今年の春には奈良の若草山の隣で植林をしました。その前には北海道の江差でヒバを植えました。北海道は文化財がないじゃないかと思うかもしれませんが。しかし三百年たてばこれからできてくる文化財の修復が必ず必要になります。それから関東の筑波山でも六カ所ぐらいやってきました。このことを思いついたのは、法隆寺でのことです。実はこの十年ほど、法隆寺のお正月の修正会に金堂で一週間おこもりをする行事に出させてもらっています。一昨年のおこもりの時、承仕という一番下級の僧侶の役をしました。一月の真つ暗で寒い、朝五時ぐらいに、金堂のカギを開け扉を開きます。法隆寺金堂は、聖徳太子によつて建立され、止利仏師が太子の御病氣平癒を祈るために太子お姿に似せてつくつたという釈迦三尊像を安置する、いわば日本の仏教の源流と言つてもいいお堂だと思います。暫くは気がつかなくなつたのですが、驚いたのは、金堂の扉が大きな一枚板の檜であつたことです。普通

一枚板でつくる必要はなく、張り合せて充分なんです。ここでは一枚板が使っているんです。その扉を開いて中に入り行をします。最初にお灯明をつけなくてはいいんです。ここは千四百年前に創建された、日本に現存する最も古いお寺ですから、火打石か何かでつけるのかなと思ったり、伊勢神宮みたいに轆轤(ろくろ)でつけるのかなと思ったら着火マンでした。逆にこれがものすごく新鮮でしたね。それで灯明に火をつけるとずっと光が広がり仏さまが現れたような感じがするんです。そしてお供えを並べていきます。そして声明、最初何のことやら全然わからないお経の教本をいただいてあとについて声を張り上げて読むんですが、そのうち何を祈っているのがわかってくるんです。声明は仏菩薩の名前を呼んで、ここに来ていただきいろいろなお願いをするという構造になっているんです。人それぞれ違うと思うけれども、何か願いを叫ぶわけです。ここでは地味増長ということが根本だという感じがありました。土地に力をくださいという祈り

であり、五穀成就の祈りです。これは食べ物をご覧くださいということでしょう。それから万民豊樂、人々が幸せになりますように。その後に鎮護国家。これらの根本は地味増長であって、そこから山林の千古の神秘を守りたいとかいろいろ派生してきます。人間の生きる根本は地味増長、すなわち土ということです。これは聖徳太子の時代からではないんですが金堂修正会という奈良時代に始まり今年で千二百三十五回目ぐらいだろうといわれている古い行なのです。そして朝昼晩二時間ぐらいつつ金堂に座り、そこで声明を唱えている間、無念無想、我を忘れるような境地に入らなければいけないのかもしれませんが。先日テレビ番組で永平寺の禅師さんに、「座禅のときに何か考えるんでしょうか」と言ったら禅師は「何も考えん」とおっしゃっていました。僕なんかは雑草がはびこるように、鳥が羽ばたくようにいろいろなことを考えてしまいます。このお寺は千四百年も前に建てられたけれども、『日本書紀』によると火事で全部燃えたと書いてあります。再建

論争とかいろいろな論争があり、結局現在では持統天皇のころ今から千三百年前に再建されたとされています。同じころ伊勢神宮の二十年遷宮が始まっています。この伊勢神宮は、二十年でそっくりつくりかえられます。建物の中には、武器からお祭りの道具から、神様が使う衣食住のすべてが入っているんです。今では技術を伝承できるように二十年間だけ保存しているのですが、昔は終わったらすぐ燃やしたり埋めたりしていたそうです。神道では常に新しいものに蘇らせてきたわけですね。日本の文化には極端なものが二つあって、一つは伊勢神宮のように常に再生産されて現在につながっていくこと、もう一つは法隆寺のようにそのまま残されていくことです。大体法隆寺の木は、五重塔を支える太い心柱が樹齢千二百年といわれています。それを千三百年前に切ったわけですから、単純に計算して二千五百年前に生きてきた木なんです。その二千五百年前こそ、お釈迦さまが生きていた時代ですね。お釈迦さんが生きておられた時代の釈迦の認識を仏教



というのですけれども、我々ははるか昔に感じます。でも木は命として現存するんです。もちろんお釈迦さまの教えはダルマとして今に伝わって、その後さまさまに展開されていったわけですが、その時代に生きてきた木が生きている、これを何と理解すればいいのか。先人たちがつくってくれたものが今お寺の形で残っていて、お寺というのは仏教の入れ物、お釈迦さまの認識の入れ物ですからとても大切です。それがそうした木でできているということを変更して感じたわけです。そしてこのお寺を我々は今後どのように守っていくんだろうと考えました。僕はもちろん所有者でもなく、直接には何の関係もないけれども、日本人というか一人間としてこのお寺を今後どうやって守っていくのか考えるぐらいは別に許されるのではないでしょう。あの時法隆寺のお坊さんたちに、このお寺がどのように守られてきたか聞いたことがあります。すると、一番功績のある人は大工さんだという答えがこぼれてきたんです。ずっと奉灯を灯して祈り続けてきたお坊さ

んももちろん功績があるんでしようけれども。毎日お寺を見回ってメンテナンスをし、雨漏りするとそこを削って、あまり新しい木を入れると目立つからいいあんばいの古材を入れてふさぐなどして、毎日見回りながら、昔の技術を見てそして合わせて直していくんです。こうして大工さんがいつもメンテナンスして、それで今まで保つてこれたんですね。高校生のときに修学旅行で京都に初めて行きました。金閣や清水寺を見て、あと本願寺も来てびっくりしました、大きいので。このように法隆寺に行く修学旅行などもそういう表面だけ見て帰っているわけだけでも、しかし中に入ると何か粗が見えてきます。メンテナンスした跡があちらこちらにあるんですね。有名な中門の裏側のエンタティスの柱は見事に補修してありますし、蔵のところの高床式柱も補修してあります。一番すごいのは、国宝東大門という夢殿に向う土地の御門は、特に補修の跡おびただしい。お金のないときもあつただろう、そういう時代さえも感じさせるような粗末な補修もあり、

また立派な補修もあり、補修の上にまた補修があつてその上にまた補修があつてあつた感じがします。こういう丹念なるメンテナンスがお寺を守ってきたんでしょ。ね。あと百年に一度大きな瓦を葺きかえたり、三百年に一度五重塔の心柱をとりかえり、三百年に一度お寺を大修理するとして、その時日本に木がないんじゃないだろうか。今や大きな檜という神社の御神木とか鎮守の森とか、そういう場所でも残っていないんですね。これは檜じゃないと駄目なんです、杉では寿命が短いんですね。やはりお寺が何で尊いかといえ、もちろん仏法僧だからですけども、その仏法僧の入れ物こそがお寺ですから、それは尊いわけです。お寺がなくなれば仏教も滅びるから非常に大切なものなのに、その建物の基本である木が、そして森が駄目になっている。木造文化の本当の基本というのは森ですよ。その森がなくなったら、木造文化も何もないんですね。これで三百年後に法隆

寺が補修するならば用材にする檜がないわけですよ。そこで考えたのは、今から植えれば間に合うのではないか、森をつくっていかなければ森林文化、木造文化は成立しないのだから。今からでもちゃんと植えて三百年待つようなシステムを作らなければ、と思ったんです。

そこで、栃木の足尾で植林をしました。その時たまたま林野庁に勤める足尾の営林署の所長だった西堀さんに、「古寺の森をつくろう」と言ったら、いいなというので、それで「長官の方に書類を上げていいか」と言うから、「それをやってくれるならやってください」と言ったんですね。国民の財産である国有林でやることは意味があることだし、台帳に記載して三百年切らないといったら、そのとおりになる保証はないけれどもそういうふうにしてくれるはずですよ。そして西堀さんがつくった稟議を見たら古寺の森が、あの『古事記』の「古事の森」と書いてあったんですよ。「西堀さん、これパソコンの入力ミスだよ。でもこちらの方がいいからこちらにしよう」と

言って「古事の森」と名前をつけたんです。結局林野庁の人たちもこれはいいいいというので、いま林野庁が主体となって行っています。できれば三百年、最低でも直径一メートルの大径木をつくる森、しかも檜をベースに、杉や櫻や楠やいろいろな木を植える混交林をつくろう、とにかく目の経済を捨てて神社仏閣、橋、お城、日本の文化を、木造文化を守る森をつくろう、ということと古事の森のコンセプトは始まりました。これはボランティアで植えて、それを守っていくために地元の協議会をつくり、そこを林野庁が管理をするんです。これを最初京都の木船神社の向かいでやったときに、やりますといったら人がたくさん

の応募がありました。雨が降って大変だったんですが、たくさんの方が来てくださいました。そのあと国際会議場でいろいろなシンポジウムをしました。第一回は三年ぐらい前でしようか、まだ新しいものですが、これも、これを全国に広げて行き、三年で六カ所になっています。まあ頑張っているなと思っっているんです。とにかく、お寺を

守る根底というのは、勉強をしてお経を読んで写経をやって仏教のことを学んで理解してということが当然の前提ですけれども、物理的には森を守らなければお寺の形は守れません。別に外国の木を使うのは悪いとは一切思いませんが、しかし国土の七割におよぶ森林面積があって、その半分以上は国有林なので、出来るだけここで材を供給してお寺を守っていくことが大切だと思います。

もう一つは僕の母方のふるさともある足尾のことです。僕は栃木県の人間ですが、歴史に名をとどめた足尾銅山が、鉱山開発でもう累々たるはげ山になっています。明治時代の富国強兵の鉱山開発で銅を掘りまくりました。僕のひいおじいさんは足尾の工夫、金堀りさんでした。当時の産業は、木炭をベースにしていました。木炭が間に合わずに生木を切って穴を掘り、生木をたくさんぶち込んで火をつける、中途半端に焼けたところで土をかぶせて蒸し焼きにしたようなものでやったというんです。また、昔は特に精度が悪かったので、からみ

とって、精錬のかすの中に鉛や水銀がた  
くさん残留したんですが、それを野積みに  
していたわけです。雨が降ると山に木がな  
いから雨が土を削る、鉄砲水が出る、全部  
山の土を削って、渡良瀬川に流れ込むわけ  
です。渡良瀬川は利根川の支流ですので、  
その汚染された水が下流一帯に流れていっ  
て足尾鉍毒事件という事件が起こりまし  
た。そこに田中正造という地元の代議士が  
国会で大演説を繰り返しました。相手が山  
県有朋とか伊藤博文とか歴史に名をとどめ  
る内閣総理大臣に対して、足尾銅山の興業  
を停止しろ、被害民が非常に苦しんでお  
る、と演説をしたわけです。当時日露戦争  
で鉄砲の弾を必要とした国は、絶対に鉍山  
を閉鎖させるのはありませんでしたが、と  
にかくひどいから鉍山を閉鎖するよう要求  
したんです。この田中正造の大きな主張の  
1つに、治山治水というのがありました。  
治山をしなければ流域が荒廃し、保水力  
もなくなるので、山を守って現流域を保全  
して治水をするようにと主張しました。こ  
れに対して、明治政府は、渡良瀬川と利根

川が合流するところでは利根川の方がパ  
ワーがあるので水を跳ね返す、もちろん洪  
水になりますね。そうしてあふれた水が毒  
だということなんです。この跳ね返され  
た水の行き場所をつくるために遊水地をつ  
くろう、という案でした。そのためには土  
地がないといって、村を一つつぶしたん  
です。そこは谷中村という村で、村を完全  
つぶして遊水地化している。渡良瀬遊水地  
というところが残っているんですが、詳し  
く知りたい人は、僕の書いた『毒―風聞・  
田中正造』や、『恩寵の谷』という小説を  
読んでいただければと思います。その田中  
正造をずっと研究してきた仲間がいて、田  
中正造がやり残したことをやろうという気  
持ちで、源流の保全と荒廃しきった足尾の  
山に木を植えよう、森林をつくらうと、  
「足尾に緑を育てる会」をつくり、今では  
NPO法人になっています。最初は僅か十  
人ぐらいで呼びかけを始めました。苗を  
持ってきてください、自分の庭に生えてい  
る木でもいいからとにかく持ってきてほし  
い。土を持ってきてください、スコップ

を、合羽を、長靴を持ってきてください、  
それからお弁当も持ってきてください。そ  
して来た人全員から千円いただきます、と  
いう呼びかけです。いなかの方で、誰も来  
ねえべな、とみんなで話していましたが、  
始めると百五十人も来てくれたんです。世  
の中まだまだ捨てたもんじゃないと、そ  
のとき思いました。さあ植えようとい  
う時、ダンブで二台分の田んぼの土が置いて  
あり、その中にクヌギやブナの苗が刺さっ  
ていたんです。これは誰が持ってきたんだ  
べね、とみんな話していた時、ふと脳裏に  
よぎったのは、『日本昔話』の六地藏の話  
でした。僕は皆に言いました。「あつ、わ  
かった、六地藏だ。あれがみんな、担いで  
持ってきてくれたんだよ」と。だれかがそ  
ういう布施をしてくれたんでしょうね。だ  
れが持ってきたかはすぐにわかりましたけ  
れど、だからといって持ってきたことをい  
ばるでもなく、何を求めるでもなく「必要  
だべ」と、ただそれで持ってきてくれる。  
そういう、本当に布施なんでしょうね。こ  
うして毎年四月の最後の日曜日にやって今

十年がたちました。ここでは、僕はみんなに、「心に木を植えようよ」と挨拶していません。僕も一本の木を植えたら、心にも木を植えていますよ。その木がどんどん大きくなっていきます。特に足尾は、全く生えないようなところにリュックで木を担いで、土も担いでスコップを持って上げていくわけですね。若い人は上の方を、若い人はそれなりのところでやっていただきたいです。そして小さい子供たちも来て一生懸命植えているんです。「あつ、僕の木がこんなに大きくなっている」という声があちらこちらから聞こえてきます。こんな自分の木を持つとよ、と呼びかけています。自分の木といっても所有権はない自分の木ですから、これは心の木ですよ。十年たつと十歳の子が二十歳になるし、その間木も育つんですよ。

こうして十年がたちました。十年やるとやはり結果が出ていますね。それでシカが多くてバランスが崩れて、でもそういうところに植えて。中には「あんたらが木を植えるからシカがふえてしまうんだ」という

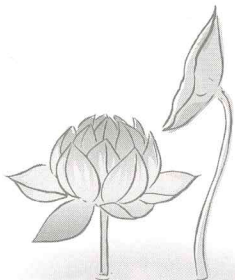
人もいますが、それは違うと思います。なぜなら既にふえていたんですから。放っておくとシカに食べられますから、網を張って防御をしています。これは大変な作業だけれども欠かすわけにはいきません。毎年三千本ぐらい植えています。それを植えたあといつも仲間を連れて谷の反対側から自分たちの仕事を見えています。網をかけるので、どれだけやったかというのがわかるわけです。そうしてみると、何というか、小錦の背中にバンドエイドを張ったというか。本当に自然って大きいですね。「百五十年かかって破壊したところなので、百五十年たてば元に戻るんじゃない」といういいかげんなことを言ったけれども、とんでもないですね。何年かかるかわからない。でも非常に楽観的かもしれない。ただひたすら植えよう、あとは自然の力で何とかするんじゃないか、と思って植えています。そのあと山の反対側に行って、みんなとこれっぽっちしか植えていないんだということを見て、いつも同じ話をするんです。これは貧者の一灯だと。

貧者の一灯の話は御承知のように仏教説話です。お釈迦さまのことをみんなが好きで、国王、大臣、大金持ちが、土地を買ってお寺を建てて寄付します。祇園精舎とか竹林精舎とか、そういうものを建てて、お釈迦さまになるべくここで修行をしてここにいていただきたい、という帰依の気持ち表現するんです。それから、お釈迦さまの周りを一万のお灯明で飾り立てるといって、万灯会をするわけです。そうして信心の気持ちを表すんですけども、ある貧乏なおバアサンがいました。お金も何もないんですけども、ただお釈迦さまに帰依する気持ち一本をお釈迦様に恐る恐る供養いたしました。隅っこに立てたんですよ。一万のお灯明を立てた大金持ちは、「おれは一万も立てたぞ」というおごりや、「こんなことをやったからきつといい見返りがあるにちがない」といったあさましい考えがどこかにあります。これはお釈迦さまへの本当の帰依の気持ちとは言えないですね。でもこのおバアサンは、本当にお釈迦様に布施

する気持ちでろうそくを一本立てたんです。それ以上でも以下でもない。その行いは純粹だったわけですね。その晩風が吹いて、雨が降った。これはお釈迦さまが吹かせた風だと言われていますが、大金持ちが自分の汗も流さずに人を使って立てた一万のお灯明はあつという間に吹き消えて、たった一本のお灯明だけ残りました。それがオバアサンの立てたお灯明でした。心から立てたお灯明でした。これが貧女の一灯、貧者の一灯という物語です。このことから学ぶことは非常に多いですね。例えば環境問題というのがあって、石油化学燃料を燃やすことが一番の原因だけれども二酸化炭素が地球を覆っていき温暖化現象がおこり、そしてオゾンホールが破壊される。もうそのメカニズムがわかっているのに、やめられないんです。しかし確実に地球温暖化現象のためにいろいろな異変が起こっている。こういう時代に我々ができることは、貧者の一灯だけれども、車に乗って、車に乗らないのが一番いいんだけれどもどうしても乗ってしまいますが、それで

も止まったらアイドリングストップでエンジンを切ったりしています。ささやかな、ささやかなことしかしていません。あるいはごみの分別収集をする、随分当たり前になつてきたけれども、まだ分けるのは面倒くさいですね。でもそんなささやかなことを繰り返すしかないんです。そうした貧者の一灯こそが環境問題に対する我々の態度だろうと思います。分別収集して何になるんだと、すぐには何もならないかもしれないけれども、積もり積もって何かになるわけでしょう。二酸化炭素を少しでも排出しないように一本でも木を植える、これも大きなことですよ。植えたからといって世の中が変わるわけじゃないけれども、貧者の一灯というのはそういうものじゃないですか。そういうみんなの節約の気分をあざ笑うかのごとく、戦争で爆弾を爆発させた油田に火をつけて逃げたりとか、それぞれの言い分はあるんでしょうが、何か納得できないことが多い。にもかかわらず、我々凡夫は貧者の一灯を続けるしかないのではないか。それで効果がないかもしれない

い。大してないかもしれないけれども、貧者の一灯をやはり続けるしかないと思っております。この貧者の一灯という人間の行いの中には、小さいかもしれないけれども人間の菩薩性を感じます。小さな菩薩、本当に小さな菩薩ですけれども、そういう行いを重ねていくことが我々のやるべきことなのではないかと考えています。今日はこれで終わります。どうもありがとうございます。



平成十六年度

## 『釈尊成道会』 厳修

## — 四十一人を永年勤続表彰 —

当会の年間行事となっている、「釈尊成道会」並びに「住職永年勤続表彰式（仏法興隆、寺門護持にご尽力されてきたご住職を対象とした永年勤続表彰式）」が二〇〇四（平成十六）年十二月八日（水）に浄土真宗本願寺派（西本願寺）にて厳修された。

成道会の法要は、午前十一時より、西山事務総長の開会の辞とともに始まり、厳かに執り行われた。

法要終了後、住職永年勤続表彰式が執行され、表彰者にはそれぞれ表彰状と記念品が手渡された。

「永年にわたり寺院住職として宗教を通じて地域社会へ御貢献いただき多くの府民の心に安寧をもたらされました。その御功績

は計り知れないものがあり、長年の御労苦に對しまして感謝申し上げます。」と、山田啓二京都府知事よりの祝辞を頂戴した。

これに應え、受賞者を代表して五十年知事表彰を受けられた海徳寺の平 祐史住職より「住職五〇年となる私たちは、戦後という混乱の時代にあつて懸命に困難を乗り越えて今に至るまで住職を続けてきた同士であります。このことを誠に感慨深く思いますし、本日表彰を受けることができましたことを、本当に有難く思っております。」と謝辞を述べられた。

今回は、五〇年知事表彰者十一人、四〇年理事長表彰者十四人、三〇年理事長表彰者十六人が表彰された。

（表彰者次頁掲載）



京都府仏教連合会 釈尊成道会 兼 住職永年勤続表彰 平成16年12月8日 於 西本願寺

平成十六年度

# 永年勤続表彰者一覽

(敬称略)

## 四〇年表彰者 十四名

真宗大谷派

伊地知 巍照(正念寺)  
増田 晃(真蓮寺)

真宗大谷派

近藤 辰雄(陶化教会)  
柏樹 正(常念寺)  
浅井 貫心(皆演寺)

## 五〇年知事表彰者 十一名

浄土宗

平 祐史(海徳寺)

曹洞宗

小野木 勝康(長榮寺)  
松尾 信亮(浄貞院)  
朽木 長綱(大雲寺)

浄土宗

佐藤 妙龍(西音寺)  
伊藤 史典(大栄寺)  
森本 照幸(長徳寺)  
木村 隆戒(西光寺)

吉水 達堂(安養寺)  
柿本 順晃(安養寺)  
八橋 義孝(源空寺)  
青木 正道(勝圓寺)

西山浄土宗

森田 清信(甘露寺)  
竹内 徳明(太慶寺)  
矢田 良和(龍洞寺)

臨濟宗妙心寺派

八木 啓一(薬師寺)

浄土宗西山禅林寺派

伊藤 高義(寶住寺)

法華宗本門流

野口 義友(長楽寺)  
長谷川 観昭(大善寺)  
桃井 晋城(龍雲院)

西山浄土宗

徳岡 亮英(泉福寺)

真宗仏光寺派

北川 隆法(安養寺)

浄土真宗本願寺派

浄土真宗本願寺派

清水 祐勝(長円寺)

浄土真宗本願寺派

橘 専昭(常行寺)

山下 哲雄(西岸寺)  
丸岡 晃了(長山寺)

那須 信孝(一行寺)  
菊藤 明道(明覚寺)

海江田 俊雄(西法寺)

木本 正信(浄善寺)

寺尾 文爾(宏山寺)  
三好 佳子(聞光寺)  
佐藤 亮順(専琳寺)  
新林 秋城(大願寺)  
西河 教信(安楽寺)  
鷺尾 芳隆(佛性寺)

平成十七年度

# 花まつり

— お釈迦様のご誕生を  
盛大にお祝い —



四月九日（土曜日）、春の恒例行事となつた京都府仏教連合会の第十七回「花まつり」が、新京極を中心に盛大に開催された。

本年度は、晴天に恵まれ新京極の六角広場において、法要行事を執り行った。

正午から、新京極通りを歩む人々に甘茶の接待や花の種を配り、花まつりをアピールした。

引き続き、午後二時に、行事開始のファンファーレが鳴り響き、六角広場において浄土宗西山深草派総本山誓願寺法主井ノ口

泰淳猊下御導師、並びに立誠仏教団式衆のもと、知恩院少年少女合唱団の歌声に併せて音楽法要が厳かに勤められた。法要では錦綾幼稚園児による献花・献灯が花を添えた。

その後、六角広場より龍谷大学プラスバンド部による演奏を先頭に河原町を經由し、本能寺までの間パレードが盛大に繰り広げられた。華頂中学・高校、文教女子中学校、光華女子高校のバトン部と立誠仏教団の子供バンドによる華麗なバントウワラーが花を添え、京都市民とともにお釈迦様のご誕生をお祝いした。



## 平成16年度 京都府仏教連合会会計収支決算書

平成16年4月1日～平成17年3月31日

## (歳入の部)

款 項 目	科 目	収 入 額	予 算 額	対 比 △減	備 考
1	会 費	489,000	587,000	△ 98,000	1カ寺1,000円
2	負 担 金	3,485,000	3,515,000	△ 30,000	加盟宗派・本山
3	雑 収 入	157,067	148,861	8,206	御祝儀・銀行利子
4	前年度繰越金	2,059,139	2,059,139	0	平成15年度繰越金
合 計		6,190,206	6,310,000	△ 119,794	

## (歳出の部)

款 項 目	科 目	支 出 額	予 算 額	対 比 ※超過	備 考
1	事 業 費	3,307,460	3,410,000	102,540	
	1 教 化 費	2,984,900	3,080,000	95,100	
	1 花まつり費	1,891,071	1,900,000	8,929	会場設営費・ポスター代・備品代等
	2 成道会費	481,367	550,000	68,633	記念品・祝宴代等
	3 仏教講演会費	612,462	620,000	7,538	講師謝礼・看板代等
	4 講習会費	0	10,000	10,000	
	2 機 関 紙 費	322,560	330,000	7,440	京佛連だより発刊・発送経費
2	組 織 強 化 費	0	10,000	10,000	
3	会 議 費	164,465	400,000	235,535	
	1 理 事 会 費	148,905	350,000	201,095	昼食・発送費等(年2回開催)
	2 評 議 員 会 費	15,560	50,000	34,440	昼食・発送費等(年2回開催)
4	事 務 総 局 費	293,966	380,000	86,034	
	1 事 務 費	196,143	250,000	53,857	
	1 通 信 費	164,820	180,000	15,180	各依頼状・案内状等の発送代
	2 消 耗 品 費	0	10,000	10,000	
	3 備 品 費	0	10,000	10,000	
	4 印 刷 費	0	10,000	10,000	
	5 会 議 費	1,323	10,000	8,677	事務総局局内会議費
	6 諸 費	30,000	30,000	0	監査諸費
	2 旅 費	15,660	30,000	14,340	タクシーチケット代
	3 渉 外 費	82,163	100,000	17,837	全仏誌広告掲載・慶弔費等
5	諸 費	26,080	50,000	23,920	郵便振替加入者負担手数料
6	負 担 金	301,840	310,000	8,160	全日仏・京都府宗教連盟負担金
7	予 備 費	0	30,000	30,000	
8	次年度繰越金	2,096,395	1,720,000	※ 376,395	
合 計		6,190,206	6,310,000	119,794	

監査の結果、諸帳簿が完備し、収支決算に相違ないことを認める。

2005年6月30日

監 事 畔 柳 正 顕 ㊟

監 事 豊 田 元 彦 ㊟

# 平成17年度 京都府仏教連合会 歳入・歳出予算

平成17年4月1日～平成18年3月31日

## (歳入の部)

款	項	目	科	目	17年度予算額	16年度予算額	対比 △減	備	考			
1			会	費	587,000	587,000	0	会費千円 (587単位)				
2			負	担	金	3,515,000	3,515,000	0	宗派・本山負担金			
3			雑	収	入	150,000	148,861	1,139				
4			前	年	度	繰	越	金	1,720,000	2,059,139	△ 339,139	平成16年度繰越金
歳入合計					5,972,000	6,310,000	△ 338,000					

## (歳出の部)

款	項	目	科	目	17年度予算額	16年度予算額	対比 △減	備	考			
1			事	業	費	3,710,000	3,410,000	300,000				
	1		教	化	費	3,380,000	3,080,000	300,000				
		1	花	まつり	費	2,000,000	1,900,000	100,000	法要・パレード・広報費等経費			
		2	成	道	会	費	650,000	550,000	100,000	法要・永年勤続表彰・懇親会等経費		
		3	仏	教	講	演	会	費	720,000	620,000	100,000	講師謝礼・ポスター調製経費等
		4	講	習	会	費	10,000	10,000	0			
	2		機	関	紙	費	330,000	330,000	0	京仏連だより		
		2	組	織	強	化	費	10,000	10,000	0		
	3		会	議	費	400,000	400,000	0				
		1	理	事	会	費	350,000	350,000	0	年2回開催 (評議員会合同)		
		2	評	議	員	会	費	50,000	50,000	0	年2回開催 (理事会合同)	
	4		事	務	総	局	費	650,000	380,000	270,000		
		1	事	務	費	400,000	250,000	150,000				
		1	通	信	費	150,000	180,000	△ 30,000	会費納入依頼等郵便代			
		2	消	耗	品	費	20,000	10,000	10,000	コピー用紙等購入経費		
		3	備	品	費	20,000	10,000	10,000	事務総局備品費			
		4	印	刷	費	80,000	10,000	70,000	京仏連用封筒調製経費等			
		5	会	議	費	100,000	10,000	90,000	事務局局内会議経費			
		6	諸	費	30,000	30,000	0	監査諸費				
		2	旅	費	100,000	30,000	70,000	タクシーチケット代他				
		3	渉	外	費	150,000	100,000	50,000	慶弔・広告代・各種義捐金			
		5	諸	費	50,000	50,000	0	郵便振込手数料 (会費・負担金) 等				
		6	負	担	金	310,000	310,000	0	全仏・京都府宗教連盟			
		7	予	備	費	30,000	30,000	0				
		8	次	年	度	繰	越	金	812,000	1,720,000	△ 908,000	平成18年度への繰越金
歳出合計					5,972,000	6,310,000	△ 338,000					

# 京 都 府 仏 教 連 合 会 評 議 員 名 簿

2005 (平成17年) 12月現在

寺院名 仏教会名	宗派名	京仏連 役職	役職	氏名	寺院名 仏教会名	宗派名	京仏連 役職	役職	氏名
知恩院	浄土宗	理事長	執事長	佐藤 諦学	清浄華院	浄土宗	評議員	執事長	蓮見 昌之
西本願寺	浄土真宗 本願寺派	理事	総長	不二川公勝	知恩寺	浄土宗	評議員	執事長	長谷雄良祐
東本願寺	真宗大谷派	理事	宗務総長	熊谷 宗恵	大教寺	正法法華宗	評議員	宗務長	西山 恵龍
妙心寺	臨濟宗 妙心寺派	理事	宗務総長	細川 景一	高野山院 堀川別院	高野山真言宗	評議員	主 監	佐々木弘傳
智積院	真言宗 言山派	理事	宗務総長	島 秀隆	専修寺 京都別院	真宗高田派	評議員	輪 番	永田 圓乘
醍醐寺	真言宗 醍醐派	理事	執行長	仲田 順和	中京仏教会	浄土宗	理事	代表幹事	伊藤 喬淳
日蓮宗京都府 第一部宗務所	日蓮宗	理事	宗務所長	杉若 恵隆	伏見仏教会	浄土宗	評議員	会 長	
曹洞宗 京都府宗務所	曹洞宗	理事	所 長	野原 泰見	花園仏教会	臨濟宗 妙心寺派	理事	会 長	柴山 昌実
光明寺	西山浄土宗	評議員	執事長	柴田 康英	多賀仏教会	浄土宗 西山禪林寺派	理事	代 表	豊田 元彦
誓願寺	浄土宗 西山深草派	理事	執事長	畔柳 正顕	井手仏教会	真宗興正派	評議員	会 長	弘元 信雄
永観堂禪林寺	浄土宗 西山禪林寺派	評議員	執事長	鬼頭 誠英	木津町仏教会	西山浄土宗	監事	会 長	成田 隆徳
興正寺	真宗興正派	評議員	宗務総長	藤井 浄行	下京仏教会 郁文支部長	浄土宗	評議員	支部長	西尾 勲生
仏光寺	真宗仏光寺派	監事	宗務総長	大谷 義博	瑞穂町仏教会	曹洞宗	評議員	会 長	大野 照和
本能寺	法華宗本門流	理事	執事長	桃井 晋城	上京支部 翔鸞組	天台真盛宗	評議員	組 長	安原 隆善
本禅寺	法華宗陣門流	評議員	執事長	赤塚 高明	三和町仏教会	曹洞宗	評議員	会 長	木戸 正隆
妙蓮寺	本門法華宗	評議員	執事長	石崎 光教	知恩院	浄土宗	理事	総務部長	貴田 善澄
金戒光明寺	浄土宗	評議員	執事長	芳井 秀教					



# 金・仏だより



## ◆悪徳商法に騙されるな!

本会顧問弁護士 長谷川正浩

先日、ある探偵事務所から都内のお寺へ手紙が一勢に届きました。

文面を読みますと「お寺の住職の身辺調査をしたところ不利益な結果が出た。これを依頼者に報告しないので50万円送金しなさい。」というものです。

また、訴状と答弁書用紙が、特定の御宗門のお寺に一勢に郵送されました。「出頭日及び、担当弁護士、裁判詳細については、必ず〇〇法律事務所迄、本状到着2日以内にご連絡して戴く様お願い申し上げます。」

と書かれています。訴状にはこのようなことは記入しませんし、訴状や答弁書用紙が法律事務所から送られてくることは、あり得ないことです。電話を掛けると振り込め詐欺まがいの被害に遇ってしまう方もおられると思います。

以上のような手口の商法は、明らかに人を騙す詐欺罪に該りますので、心当たり、見の覚えのあるなしに拘らず、速やかに近くの弁護士とか警察署で相談すべきと思います。被害に遇ったときや遇いそうになったときには、直ちに「法的手段をとる」ということが、自分だけでなく、社会から被害を根絶する第一歩だと思えます。

## ◆本会推薦国会議員との 仏教懇話会開催

10月27日、28日の両日、赤坂プリンスホテルを会場に、本会加盟団体の代表者と本会推薦の衆・参両院国会議員を招いて「仏教懇話会」を開催しました。本年の2月に懇談朝食会として行われましたが、菩提寺の住職と檀家という関係をより一層深める意味合いを込め「仏教懇話会」と名称を改めました。

両日、午前7時45分開会。27日は、里見達人理事長の挨拶に続いて、自由民主党を代表して青木幹雄参議院議員会長が挨拶を行いました。本会関係者24名、議員及び代理者57名が出席しました。28日は、里見理事長挨拶の後、民主党の仙谷由人衆議院議員が挨拶。本会関係者19名、議員及び代理者21名が出席しました。

両日の法話は、奈良康明駒澤大学総長が日常の仏教用語の意味と人とのふれあいについて語られました。議員各氏は、国会審議ですり減った精神に穏やかな話が染み割ったようで柔らかな表情を浮かべていました。

### 【本会推薦議員 内閣就任者一覧】

小泉純一郎(内閣総理大臣)、安倍晋三(内閣官房長官)、与謝野馨(内閣府金融担当大臣)、中馬弘毅(内閣府行政改革担当)、額賀福志郎(防衛庁長官)、長勢甚遠(内閣官房副大臣)、谷垣禎一(財務大臣)、小坂憲次(文部科学大臣)、河本三郎(文部科学副大臣)、上川陽子(総務大臣政務官)、西田猛(財務大臣政務官)、西川京子(厚生労働大臣政務官)、金子恭之(農林水産大臣政務官)、石田真敏(国土交通大臣政務官)  
(敬称略)



〒105-0011  
東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 2F  
電話 03-3437-9275 FAX 03-3437-3260  
http://www.jbf.ne.jp  
E-mail info@jbf.ne.jp